

中国電影大観



孔家の人々(闕里人家 / Kong's Family)

2007(平成19)年11月4日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督=吳貽弓 / 出演=朱 旭 / 袁之遠 / 趙爾康 / 寧理 / 張文蓉 / 魏宗万 (東光徳間配給 / 1992年中国映画 / 101分)

第3章

忘れていた何かがここにある

……今を生きる、5代にわたる孔家の人々を描いた面白い映画がこれ。核となるテーマは、妻子を捨てて革命運動に身を捧げた父親^{リンタン}令譚とその息子^{ターシェン}徳賢との確執。この映画を楽しむためには、孔子が生まれた山東省の曲阜^{きょくふ}というまちの理解が不可欠。したがってこの映画は、孔子廟、孔子府、孔子林の観光を中心とした曲阜見学とセットで鑑賞してほしいものだが……。

曲阜というまちは……？

山東省にある曲阜というまちは、人口55万人のうち約10万人が孔姓を名乗っているという不思議なまち。ちなみに、孔子は紀元前551年、曲阜から30kmほど南東に離れた昌平郷の農村、陬邑に生まれた。彼は魯国の始祖周公を尊崇し、古来の思想を集大成し『詩経』『書経』を編纂、「礼」「楽」を制定、『易経』を注釈、『春秋』を著した。孔子の思想の基本は、他者への慈愛の心「仁」と、道德・儀礼・伝統・躰・規範などの社会的なきまりである「礼」に重点をおくもの……。

そんな孔子の末裔は、現在全世界に約70万人いるといわれているが、そのうち約10万人が故郷の曲阜で暮しているというわけだ。もっとも、それはあくまで、いどこ、はとこそ他諸々の血族を含めた総数であり、天皇家と同じように、本家を継ぐ者は常に1人だけ。

一体どれが本当……？

私が曲阜・泰山・済南・青島をめぐる山東省クルーズ（高速道路をめぐる旅）に出

かけたのは、2005年10月20日～24日だった。そして、曲阜ではこの映画にも登場する「闕里賓舎」(ホテル)に1泊し、孔子廟、孔子府、孔子林などを見学した。その孔子林見学の時に出会い、名刺交換をし、記念撮影をしたのが、魚の絵を描いていた孔子の75代目の子孫だという青年孔祥涛クン。

ところが、私が読んでいたガイド本(『地球の歩き方』)には、「前堂楼は、第76代目の子孫で衍聖公の孔令貽の妻子が住んでいた場所。後聖楼は、第77代目の孫で衍聖公の孔徳成の住宅であった」と書かれていた。

さらに、日本に帰った直後、たまっていた新聞を整理していたところ、10月23日付朝日新聞朝刊には、「孔子の家系図長さ世界」「82代 2500年余り」という見出しの記事が目に入った。北京の山根祐作記者の報告によれば、儒学の祖・孔子の家系図が「世界一長い家系図」として、ギネスブックに認定されたというわけだ。そしてそこには「紀元前6世紀に生まれたとされる孔子の子孫は、現在まで82代にわたる」と書かれていた(中国(曲阜・泰山・済南・青島旅行「中国5日間」)旅行記参照)。一体どうなってるの……？

5代にわたる孔家の人々とは……？

映画『孔家の人々』に登場する孔子の継承者とは、①75代目、90歳の孔祥弼コン・シアンピー (袁之遠ユアン・チーユアン)、②76代目、70歳の孔令譚コン・リンタン (朱旭チュウ・シュイ)、③77代目、現在の当主の孔徳賢コン・ターエン (趙爾康チャオ・アルカン)、④78代目、24歳の孔維本コン・ウェイベン (寧理ニン・リー)、そして⑤今1歳くらいの79代目の赤ん坊、の5代にわたる人々。最初に断っておくが、これはあくまでこの映画のための設定であり、架空のお話……。

さて、そんな孔家の人々に、一体どんな人間ドラマが……？

卒寿祝いは大イベントだが

私が2年後に迎えるのは60歳の還暦だが、その後は古希(70歳)、喜寿(77歳)、傘寿(80歳)、米寿(88歳)と続き、90歳の長寿祝いが卒寿。私は到底そこまでたどり着けないと思っているが、孔家75代の最長老、祥弼シアンピーは心身ともにしっかりしているから、少なくとも白寿(99歳)、百寿(100歳)までは生きられそう……？

そんな卒寿のお祝いは大イベントだから、令譚リンタンがお祝いに駆けつけてきたのは当然。令譚リンタンは若い時に妻と子どもを捨てて、革命運動に身を捧げたらしい。そしてその結

果（?）、大臣の地位にも就き、今は北京で生活しているらしい。

そんな革命の英雄の孫にあたる第78代24歳の維^{ウェイベン}本^{リンタン}は、令譚^{リンタン}の里帰りを大きな喜びをもって迎えたが、息子の77代の徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}は不機嫌で、令譚^{リンタン}をほとんど無視している状態。そのため、徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}の妻金^{チン・ラン}蘭^{チヤン・ウェンロン}（張^{チン・ラン}文^{チヤン・ウェンロン} 蓉^{チヤン・ウェンロン}）の気づかいは尋常ではない。しかし、これほど2人が対立しているのは一体なぜ……？ そんな、孔家^{リンタン}における令譚^{リンタン}と徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}の父子の確執が、この映画最大のテーマ……。

若者が現代的なのは当然だが

誠実で真面目かつ一本気なのはいいが、多少気が荒いところが欠点の徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}は、家の庭に車が置いてあるのを見てビックリ。徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}が問いただすと、何と維^{ウェイベン}本^{リンタン}が寿棺を売ってこの車を購入したらしい。維^{ウェイベン}本^{リンタン}はなぜそんな勝手な行動を……？

それは、教師の仕事を早々に辞めてアメリカに留学したいと考えている維^{ウェイベン}本^{リンタン}は、この車でタクシーをやってお金を稼ぎ、留学資金にあてるため。こんな話を聞けば誰でもすぐにわかるとおり、維^{ウェイベン}本^{リンタン}はかなりのお調子者……？ また後ですぐにわかるが、彼はアメリカに留学したいと言っているわりには、英語の勉強は全然やっていないよう。せっかく、中国研究のためにアメリカ人女性アンナが曲阜に来ているのだから、その案内をするだけでなく、彼女から英語を教えてもらえばいいのに……。こんな以前からの維^{ウェイベン}本^{リンタン}の生活態度を見て既に業を煮やしていた父親の徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}は、車をすぐに処分しろと命じたが……。

90歳、70歳、50代（?）、24歳、1歳（?）と、5代も続く孔家の「世代観」を明確に打ち出すためとはいえ、24歳の現代青年維^{ウェイベン}本^{リンタン}がこれほどお調子者に描かれているのは、ちょっと意外……？ これでは、孔家の行く先が思いやられるというものが……？

孔子林にはお墓がいっぱいだが

曲阜観光では、孔子廟、孔子府、孔子林の3カ所の観光は絶対の定番メニュー。呉^{ウー・イーゴン}貽^{イーゴン}弓監督がこの映画のアイデアを思いついたのは、この孔家一族の墓碑が千も立ち並ぶ巨大墓地を目にした時とのこと。

しかし、どうもその墓碑の中には、ちゃんと第〇〇代目と刻されていないお墓もあるようだ。それが令譚^{リンタン}の亡き妻であり、徳^{ターシエン}賢^{ウェイベン}の母親のお墓。令譚^{リンタン}は、父祥^{シアンピー} 弼^{ピー}の卒

寿祝いのために曲阜に戻った今、当然のようにこのお墓にお参りしたのだが、そこに現れた息子^{ターシエン}徳賢^{リンタン}は、令譚による母親のお墓参りを断固拒否する姿勢を……。

母親と子供を捨てて革命運動に走った自分をこれほどまでに拒否する徳賢^{ターシエン}の姿を見た令譚^{リンタン}は、自分を父親失格だと悟らざるをえなかった。そして、令譚^{リンタン}はそんな思いを孫^{ウェイベン}の維本^{ウエイベン}に語って聞かせたが……。

飄々と生きる令然の生き方は魅力的だが

こんな孔家のゴタゴタを少し距離をおいて外から温かく見守っているのが令譚^{リンタン}の弟、つまり徳賢^{ターシエン}のおじさんにあたる孔令然^{コン・リンラン}（魏^{ウェイ}宗^{ツォン}万^{ワン}）。令然^{リンラン}は今は結婚もしていないし子どももないから、孔家の本流とは好対照。そして、今日も1人で観光馬車をひきながら気楽に飄々と生きる姿は実に魅力的。しかし、祥弼^{シアンピー}の90歳の誕生日が終わり、令譚^{リンタン}が北京に帰ろうとする直前、令然^{リンラン}が妻と子どもを捨てて革命運動に身を捧げた令譚^{リンタン}に対して投げかけたひと言は衝撃的。なるほど令然^{リンラン}がずっとやもめを守っていたのは、そんな理由があったのか……？

飄々と気楽に生きているようにみえても、内心大きな悩みをもっているのは結局みんな同じだということ……。

望文台にも行かなくちゃ

この映画のラストには望文台が登場するが、私はそこを訪れたことがない。孔家の5人の男たちと徳賢^{ターシエン}の妻金蘭^{チン・ラン}とそして維本^{ウェイベン}の妻の間で令譚^{リンタン}の過去をめぐっていくつかの深刻なストーリーが展開されるが、父親に棄てられた母親の息子というイメージが染みついている徳賢^{ターシエン}にとって、容易に父親令譚^{リンタン}を許せないのは仕方ないところ。他方、いつまでもそんなわだかまりをもって父との対話を拒否しても無意味なことも明らか。

祥弼^{シアンピー}の90歳の誕生日を終え、遂に令譚^{リンタン}が北京に帰る日を迎えても、徳賢^{ターシエン}のわだかまりが解消されなかったことは、令譚^{リンタン}を見送る人々の中に徳賢^{ターシエン}がいなかったことによって明らか。令譚^{リンタン}は傷心のまま車に乗り込んだが、そこで大きな役割を果たすのが望文台。さあ、そこにはどんな人間ドラマが待っているのだろうか……？

この映画の感動を確認するためにも、2度目の曲阜旅行ではこの望文台を是非見学しなくては……。

2007(平成19)年12月1日記